

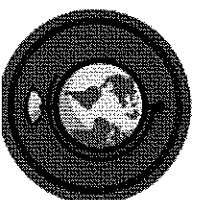


「余りある時間を豊かに」 ～ 13歳のハローワークから、職業選択に関して ～

村上龍氏の「新13歳のハローワーク」が手元にあります。これは旧版から7年を経、新たに社会的背景や年齢の位置づけなどを付け加えて、わかりやすく子どもたちに示しているものです。人には、向き不向きということもあり、同じく仕事に就くのであれば「向いていること」「自身の志向性」や「生きがい」にこそ目を向けた方がいいというのが趣旨の一つであります。もちろん、仕事というものが、趣味の性質でないとは言ってもなく、生涯にわたる努力の成果として、人の価値としてもはじめて見いだされるという類のものであります。以下に、村上氏の述べられている内容を、「はじめに」から紹介しましょう。

「探す」ではなく、「出会う」

「好きなことを探さない」「好きなことを見つけなさい」とよく言われます。でも、それではどうやって探せばいいのか、どうすれば見つけることができるのか、教えてくれる人はなかなかいません。(中略) 探せば見つかるというものではないからです。つまり、「探して見つける」ものではなく、「出会う」ものなのです。



村上氏は、自分探しの旅と称して、世界を歴遊する例を引き合いに、自分探し、つまり個人内での自己探索には限界性があると言います。さて、「出会う」ための示唆をあげていきます。

「出会う」ためには、「どこかに自分が好きなことがきつとあるはずだ」と心のどこかで強く思う必要があります。そう思っていないければ、何かに出会って、心が傾いたときに、「これかもしれない」と思うことができなからず。ぼんやりと日々を過ごすよりも、いろいろなことに関心を持つ方が、出会う確率が大きくなります。…

「焦る必要がない」 (みなさんのような年齢の時期についての見解)

村上氏は、私たちの年齢と位置づけ、可能性について、次のようにも述べています。教育を受け、社会に出てしまえば、時間が経って、だいたい28歳くらいをめどに、自分がどうやって生きていきのか、つまり職業などを決めればよいということです。28歳で職業を決めたあとは、だいたい35歳くらいまで、その職業に必要な訓練と経験を積むこととなります。(中略) 28歳という年齢は、若い大人と成熟した大人との「中間点」だと言えるかもしれません。

みなさんであれば、28歳—18歳で、約10年の考慮時間が、自らの資源として控えています。例えば、私自身も、職業人として考えたとき、30歳手前で思い悩み、困難を克服したことがあったこと、35歳までに専門的教養を身につけておこうと心に決め、自分なりに努力した時期等、人生には思うべき時期と課せられる負荷があるものだと思えます。

さらに、村上氏は、次のように述べ、若い人たちを鼓舞しています。

充分な時間です。「自分に向いている職業」といつか…(中略) という強い思いを持ち続けてください。その思いが、好奇心がすり減るのを防いでくれます。(中略) 現代は、生きにくい時代です。(中略) このことはいつの時代でも同じことですが、社会の矛盾や不正を、若者は大人たちから押しつけられます。(中略) それでも、すべての子どもや若者は、どうにかして、生きのびていく必要があります。だまされないように、好奇心をつぶされないように、いろいろなものに積極的に興味を示して、子どもころころは「好きなこと」に、成長したら「自分の向いている職業」に、出会うことができたらと思います。